

びわこの 考湖学

25

天正14(1586)年ごろ、豊臣秀吉の命により、大津城と呼ばれる城が大津市浜大津に築かれたことをご存じでしょうか。残念ながら、現在はほとんど面影を見ることはできませんが、日本史の大事件にかかわりながら登場し、消えていったのです。

まずは、大津城が築かれた理由をみることから話を始めましょう。

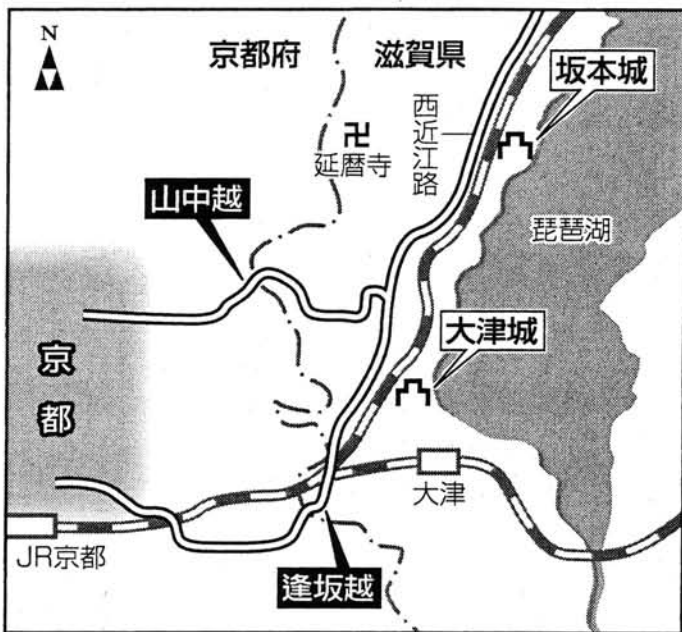
元亀元(1570)年、当時の人々を震撼させた織田信長による山門延暦寺焼き打ちが行われた年でした。浅井、朝倉および彼らに加勢した延暦寺との争いが続く中、翌元亀2年に比叡山麓の下阪本に坂本城が築かれ、明智光秀が城主となりました。この城は、延暦寺の監視をするともに、近江平定を目指すひとつの拠点としての役割を担っていたのです。

イス・フロイスが「信長が安土山に建てたものにつき、この明智の城ほど有名なものは天下にない」と言われた名城でしたが、天正10(1582)年の本能寺の変の後に落城しました。

その後、丹羽長秀によって再建され、維持されていたのですが、天正14年ごろに廃されて大津城が築されました。なぜ、坂本城が廃されたのでしょうか。

当時、秀吉は賤ヶ岳の合戦で柴田勝家を破り、畿内近国を平らげ、かつ、徳川家康との間にも和議を成立させており、坂本城が担っていた近江平定のための軍事上の役割は必要ありませんでした。加えて、秀吉は信長とは違って延暦寺を復興し、保護していくという政策をとったことから、延暦寺を監視するという役割も必要なくなりました。つまり、存在意義がなくな

坂本城と大津城



なったのです。

では、なぜ大津へと城を移したのでしょうか。

秀吉が大坂城を築くことにより、政治経済の中心は大坂に移ることにより、物資は大坂を目指して輸送されることとなりました。京都と延暦寺との

寺のかかわりで繁栄していた坂本の港から山中越えで京都に向かったから大阪を目指すよりも、逢坂山を越えて伏見に出て大坂へ向かう方が比較的便利であることから、大津の港の重要性が高まったのです。

その具体策として、天正15年、秀吉は大津浦に近江の諸浦から船100隻をあつめさせ、大津百艘船と呼ばれる湖上輸送船団を組織します。これにより、秀吉によって湖上輸送は独占され、「統一」されていったのです。坂本城から大津城への動きは、信長から秀吉への動きでもあったのです。

五奉行のひとりであり秀吉の縁者でもあった浅野長吉(長政)や同じく五奉行のひとりであった増田長盛らが城主をつとめたところに、その重要性をうかがうことができます。

歴代の大津城主は大津百艘船の管理を大きな職務の一つとし、これらの船が集結する大津の港は、東日本から大坂へと持ち込まれる物資の中継地として繁栄したのです。

(滋賀県文化財保護協会 畑中英二)

信長から秀吉 物資は大坂へ